

薬剤部 DI ニュース

熱性けいれんについて

●熱性けいれんとは

熱性けいれんとは主に生後 6~60 ヶ月(0.5 歳~5 歳くらい)までの乳児期におこる、通常 38℃以上の発熱に伴うけいれんと定義される。熱性けいれんの条件として重要なことは、けいれんの原因となる脳の病変が存在しないことである。細菌性髄膜炎やインフルエンザ脳症の際にみられるけいれんは、発熱を伴っていても、熱性けいれんではない。熱性けいれんは、年齢が大きくなると自然に消退する一般的に予後良好な疾患である。

●熱性けいれん重積

一般的に予後良好とされる熱性けいれんにおいて、最も問題となるは熱性けいれん重積(長時間持続する熱性けいれん)である。通常 30 分以上持続するものを熱性けいれん重積とすることが多いが、持続時間の定義をより短くすることが検討されている。熱性けいれん重積は、長時間にわたって心拍数や、呼吸数、動脈血酸素飽和度の異常が持続する救急疾患であり、熱性けいれん全体の約 5%が重積発作である。

●単純型熱性けいれんと複雑型熱性けいれん

熱性けいれんは、単純型熱性けいれんと複雑型熱性けいれんに分類され、以下の 3 項目のうち、1 つ以上をもつものを複雑型熱性けいれんと定義し、いずれももたないものを単純型熱性けいれんと定義する。

- 1) 部分発作
- 2) 15 分以上持続する発作
- 3) 24 時間以内に 2 回以上発作がみられるもの

部分発作とは、体の一部のみのけいれん発作や、けいれんはみられず意識減損のみを主徴とする発作
全般発作は全身の左右対称性のけいれん発作であり、熱性けいれんの多くは全般発作

熱性けいれん全体の 2/3 は単純型であり、1/3 が複雑型である。

●熱性けいれんの再発率

熱性けいれんを 1 回おこした患者が、再度熱性けいれんをおこす確率(再発率)は約 30%である。熱性けいれんの再発を予測する因子は以下の 4 つである。

- 1) 両親のいずれかが熱性けいれんをもつ
- 2) 1 歳未満での熱性けいれんの発症
- 3) 発熱してから 1 時間以内の熱性けいれんの発症
- 4) 熱性けいれん発症時の体温が 39℃以下

上記いずれかの因子をもつと、因子をもたない場合に比べて、再発の確立は 2 倍以上となる。

●熱性けいれんの急性期の管理

けいれん重積状態と判断された場合は、けいれんを頓挫させるために迅速な介入が開始される。静脈路が確保され、経静脈的に抗けいれん薬が投与される。けいれん重積状態に対して、最初に経静脈投与される薬剤はミタゾラム(院内採用:ドルミカム注射液 10 mg)、もしくはジアゼパム(院内採用:ホリゾン注射液 10 mg)であることが多い。効果の発現が速く、有効か無効か、速やかに判断が可能である。副作用として問題になるのは、呼吸抑制であり、血圧低下、気道分泌物増加も注意すべき副作用である。

●熱性けいれん予防のための管理

持続時間の短い熱性けいれんで、頻度が多くなければ特に予防は必要ない。しかし、下記に提示した条件を満たす患児では、発熱時にジアゼパム(院内採用:ダイアップ、セルシン)を投与し、熱性けいれんを予防することが、推奨されている。

以下の適応基準 1)または 2)を満たす場合に、ジアゼパムを予防的に使用する。

- 1)遷延性(持続時間 15 分以上)の熱性けいれんを 1 回でもおこした場合
- 2)以下の①～⑥のうち 2 つ以上を満たす熱性けいれんを 2 回以上認めた場合
 - ①部分発作もしくは 24 時間以内に反復する熱性けいれん
 - ②神経学的異常をもつ患児
 - ③熱性けいれんもしくはてんかんの家族歴
 - ④12 ヶ月未満での発症
 - ⑤発熱後 1 時間未満での熱性けいれんの発症
 - ⑥38℃未満での熱性けいれんの発症

※持続時間の長い熱性けいれんをおこした患児は、次におこす熱性けいれんも持続時間が長い傾向にあることが知られているため、1 回でも持続時間の長い熱性けいれんをおこした場合は、発熱時にジアゼパムによる熱性けいれん予防を行うことが必要である。

ジアゼパムによる熱性けいれんの予防方法は、通常 37.5℃以上に体温が上昇した時にジアゼパムを 1 回使用し。8 時間後、発熱が続いている場合は、さらにもう 1 回ジアゼパムを使用する。熱性けいれんは発熱初日に発症することが多いため、通常、発熱初日に 2 回投与する。この予防法により熱性けいれんの 70%～80%が予防できるといわれている。ジアゼパムは坐薬であっても内服であっても、ほぼ同等の効果を持つ。

●気をつける必要がある薬剤

テオフィリン(院内採用:テオドール)は熱性けいれんの既往のある患児の熱性けいれんの持続時間を長くする可能性があり、小児に投与するにあたっては注意が必要である。特にけいれんの既往がある場合や、3 歳以下では、推奨されない。抗ヒスタミン剤も熱性けいれんに既往が患児において、熱性けいれんの持続時間を長くすると報告されており、発熱期間中の使用は推奨されない。